透明化する社会と「抵抗の力」*

── 1950 年代アドルノにおける「経済と社会」の生成 ──

表　　弘一郎

目次

はじめに
1. アドルノのゼミ記録 ──「経済と社会」
2. 講演の概要
3.「社会の傾向的透明化」
4. 人間の「生きた感情」──「居心地の悪さ」の諸々の根拠
5. 主観的反省形態の現実の基礎
6. 講演のメモ書き
おわりに
資料：アドルノのゼミ記録（抜粋）
参考文献

はじめに

Th.W. アドルノ（1903-69）の戦後 20 年間（1949-69）の活動をどのように評価するかは，アドルノが「公的知識人」であったため，その思想の解釈に留まらず，戦後ドイツの再建史に関わる事柄でもある。すなわち，全体主義の悲惨を克服して戦後社会を再建した歴史の「評価」に繋がりうる事柄と言えよう[(1)]。この点に関わる資料は，議論の基礎となりうるものがすでに出版されている状態だろう（Albrecht et al.（1999）や Demirović（1999）など）。アドルノ思想に限定しても，全集刊行後も，『遺稿集（NaS)』と書簡類（1993-），Frankfurter Adorno Blätter（1992-2003），講演録（2019），ゼミ記録（2021）などが続々と出版され，アドルノ研究にとっての豊富な素材を提供しつつある[(2)]。これらの資料類をもとに様々な問いが見出されうるだろうが，おそらくそのひとつは次のようなものだろう。すなわち，戦後のアドルノの 20 年間の活動には一貫して能動性と肯定性が見られるのか，それとも何らかの契機によって能動性と肯定性が影を潜め，それによって（一般的に流布しているイメージも含めて）後の否定的評価を招くことになったのか，というものである。その際，具体的に検討すべき論点には，例えば戦後ドイツ社

* 本誌の匿名のレフェリーの方々からいただいた貴重なご助言に感謝いたします。

会の知的再建への寄与，「経済の奇跡」のなかでのより良き社会の建設可能性の模索，社会学による知的刷新，戦後世代の教育を通じたカタストロフの自省とありうるカタストロフの回避，概念によって概念の困難を乗り越え事柄に向かおうとする哲学の構築などがあるだろう。

本論文の目的は，『講演録』（Adorno（2019a））所収の「今日の人間的な社会」の分析を通じて 1950 年代のアドルノの言論活動の一端を検証し，以上の問いの究明の一助とするところにある。戦後 20 年間の知的営為と活動を分析するには，まず戦後再建期の 1950 年代のアドルノの言論活動を検証する必要があるだろう。同年代に行なわれた講演を分析すると，とりわけこの時期のアドルノの言論活動にはある種の能動性と肯定性が見出され，そこから従来のアドルノ思想の評価の刷新に至る可能性があると考えられる[(3)]。この能動性と肯定性については，『講演録』（Adorno（2019a））所収の「社会学のアクチュアリティー」（1951.2.23）や「今日の個人と社会の関係について」（1957.2.13）に明らかである[(4)]。本論文は，同時期に行なわれた講演「今日の人間的な社会」（1957.10.16）を取り上げ，引き続き 1950 年代のアドルノの言論活動に即して能動性と肯定性を検証する。その際，その頃開講されていたゼミの記録も適宜参照しよう。

本論文にはもうひとつの目的がある。批判理論の後の世代からは看過される傾向のある肯定的なアドルノの姿を資料から掘り起こすことである。これは，アメリカで受容されて現代の諸問題に対応可能になった批判理論や，フランクフルトから引き離された批判理論の可能性を否定することではまったくない。むしろ，本論文では，批判理論の応用可能性に資する文献上の基礎的作業を行なっている。

まず第 1 節ではゼミ記録と「経済と社会」という問題圏との関係を概観し，第 2 節では時代背景とともに講演の概要を見る。第 3 節から第 5 節にかけては講演本体の分析を行ない，第 6 節では講演のメモ書きを参照して論点の補足を行なう。最後に，ゼミ記録と講演とを関連づけて，1950 年代のアドルノの問題関心を概観し，知られざるアドルノ像の一端を明らかにしよう。

1. アドルノのゼミ記録 ――「経済と社会」

フランクフルト大学でのアドルノのゼミ記録は，Braunstein（2021）が明らかにしている。ゼミのテーマは，執筆中・計画中のものを含む彼の著書や講義，研究所で進行中のプロジェクト，同時代の出版物をめぐる研究発表（ベルクソンやポパー，ガルブレイスなど）など多岐に渡るが，そのなかでも，とりわけ社会の概念や社会理論に議論の中心を置いたゼミがほぼ毎年継続的に行なわれていた。詳しくは，本論文末尾の「資料：アドルノのゼミ記録（抜粋）」を参照されたい。

ところで，アドルノの社会概念[(5)] が明確に姿を現すのは 1954 年の草稿（Adorno（2003））においてであり，出版物としては 1956 年の『社会学的補遺』所収の第 2 章である[(6)]。『福音国家事

典』の「社会」(1965，GS8 所収）やその後の講演も含めて時系列で示すと以下の通りである。

1954　草稿「社会」 → 1956 『社会学的補遺』第 2 章「社会」
1957　講演「今日の人間的な社会」
1965　事典項目「社会」 → 1966　講演「社会」への序言

これらのテクストの異同を社会概念の生成として検討することはそれ自体別稿の課題である。ただ，これらをゼミ記録と照らし合わせると，ある興味深い事実が浮かび上がる。

すなわち，講演「今日の人間的な社会」(1957.10.16）が行なわれた後に，「経済と社会」をテーマとするゼミや社会概念をめぐるゼミが行なわれた事実である。実際，1957/58 冬学期　社会学主ゼミ「経済と社会 1」の第 1 回は 1957.11.12 に行なわれている（社会概念をめぐるゼミとしては，1959 夏学期ゼミ「社会とは何か」)。講演「今日の人間的な社会」でも折に触れて経済と社会との関係をめぐる論点や経済への言及が登場するが，ゼミでは引き続き「経済と社会」をめぐる議論が展開されたと推測される（1958 夏学期には社会学主ゼミ「経済と社会 2」が行なわれている)。問題は，講演後の「経済と社会」ゼミの議論がその後どのように結実したかである。新自由主義（W. オイケンや A. リュストゥウ）をめぐる，従来想像されていたよりも遥かに早いアドルノのコメント（第 7 回，1958.2.4）やミクロ経済学に対する批判（第 9 回，1958.2.25）などは，アドルノ自身が手がけた出版物になってはいない[(7)]。一方，1965 年の「社会」の基調を成しているのはマルクスである。すなわち，「経済と社会」というテーマは，近代経済学の批判からマルクス解釈にもとづく社会概念へ至る間の知られざる議論を含む可能性がある。この講演はまさにその端緒に位置するものと捉えてよいだろう[(8)]。

「経済と社会」ゼミのもくろみは，全体性としての社会をめぐって省察を進め，経済（Ökonomie）と狭い意味での社会学との関係について省察を深めることにあるとされている（FSA2，S.49)。問われるべきは「社会学の脱経済化（Entökonomisierung)」であった（FSA2，S.51)。さらに，ゼミ記録には法則性を探究する問いも見られる。「経済と社会 1」ゼミの第 1 回での問いのひとつは，「経済と社会の関係は社会過程の『決定的な力（mächtige Macht)』なのか，経済的なものに依存しない諸々の合法則性（Gesetzmäßigkeiten）は存在するのか」（FSA2，S.50）というものだった。講演「今日の人間的な社会」には，こうしたゼミの問題意識へと至る萌芽が看取され，ここに講演分析の意義がある。

2. 講演の概要

講演を概観しよう。講演「今日の人間的な社会」は，「今日の個人と社会の関係について」と

同様,「国家学の発展教育のためのヘッセン州大学週間（Hessische Hochschulwochen für staatswissenschaftliche Fortbildung)」で行なわれた講演である[(9)]。第 20 回大学週間は 1957 年 10 月 6 日から 16 日にかけて Bad Wildungen にて開催された。開会挨拶は A. ヘンニッヒが行ない，アドルノは最終日の朝に行なわれた閉会講演を担当した。講演冒頭で，アドルノは聴衆の大半が帰宅を犠牲にして講演を聴いてくれていることに感謝の意を表している（Adorno（2019a）189)。

大学週間の全体テーマは「社会と国家」であり，H. マウス「社会学理論をめぐる注釈」や H.L. ブリル「学問としての政治の対象と方法」，W. ヘンニス「ドイツの国家観（Staatsanschauung）の問題について」などを含む 14 本の講演が行なわれた（Adorno（2019a）650-651)。

編者はアドルノが 1957 年から 1963 年にかけて行なった講演すべてに教育への省察が見られると分析している（Schwarz（2019）764)。確かに「今日の個人と社会の関係について」は教育的配慮が随所に見られる講演だが，この講演に関しては，それに加えて同時代のドイツ社会学との関係に基づいて考察すべき論点があると考えられる。なぜなら，アドルノ自身が講演冒頭で同時代のドイツ社会学にとっての課題に言及しているからである。

3.「社会の傾向的透明化」

それでは，講演の構成にしたがって講演本体の分析を行なおう。講演は休憩を挟んで 2 部構成であり，最後に結論に該当する箇所がある。この第 3 節では第 1 部の分析を，第 4 節では第 2 部の分析を，第 5 節では結論の分析を行なう。煩瑣ではあるが，各節のタイトルには，講演のメモ書き（“Wildungen 1957”（Adorno（2019a）540-543)）の見出し語をほぼそのまま用いている[(10)]。

講演冒頭でアドルノは次のように述べる。「今日の人間的な社会」というテーマの定式化には多岐に渡る要請が寄せられ，この講演では現在の社会の本質的な諸問題をめぐってある試みを行なうと言う。なぜか。現在の社会学では，個別の諸領域と個別の諸問題にますます縮減する傾向があるからであり，部分的には，まさにドイツでは，社会学（soziologische Wissenschaft）のなかである失望が広がっているからである（Adorno（2019a）189)。

このようにアドルノは，明らかに当時の社会学の問題点を踏まえて，独自の社会理論を展開しようとしている。こうした論調は，帰国直後の講演「社会学のアクチュアリティー」(1951）の肯定的な論調，すなわち社会の自己省察に希望を託す議論とはやや異なることが見て取れる（この点については表（2022）を参照)。

とはいえアドルノは,「人間的な社会」について展開する仕事は一人の社会学者には荷が重すぎるため，講演では「人間的な社会」について十分に展開できないと言う（Adorno（2019a）191)。私たちが生きている社会は,「ヘッセン・アトラス」[(11)] で描かれているようなものではな

いと言うのである（ebd.）。

アドルノはR. マートンの「中範囲の理論」を批判して，社会の一般的な運動法則を掴み出そうとする姿勢を見せる。意外なことに，アドルノが強調するのは「現代社会の優勢な複雑性と不透明性（Unübersichtlichkeit）」（Adorno（2019a）193）ではなく，その透明性である。

「社会の透明性（Durchsichtigkeit）の増大は，それ自体が現代社会の全体的発展の機能なのです」（Adorno（2019a）194）。

こうした論点は，1960年代にしばしば強調される「社会の不透明性（Undurchsichtigkeit）」という把握とは対照的であり，1950年代に特徴的な観点と言える可能性がある。問題は，メモ書き冒頭で端的に述べているが，透明化の事実と認識の乖離，すなわち不透明性の認識の原因である。そこではこのように述べられている。「社会は確かに無数に分化しているが，その基本構造において以前よりもはるかに透明になっている。問題はただ，それにも関わらずなぜ社会は〔そのように〕認識されないか，ということ」（Adorno（2019a）540，〔　〕内は引用者，以下同様）だと。したがって，まずは講演を詳細に分析して，こうした対照的な論点をアドルノの問題圏の生成過程に位置づける必要があるだろう。以下，アドルノが「社会の傾向的透明化（das tendenzielle Durchsichtig-Werden der Gesellschaft）」（Adorno（2019a）197）と特徴づけるものを詳細に見ていこう。議論がなされているのは講演の前半（第1部）である。この「傾向的透明化」の特徴，すなわちメモ書きで「透明性のもろもろのモティーフ」（Adorno（2019a）540）としてアドルノが挙げているのは，「世界の縮小，社会計画，合理性の増大，古い特権の妥当性喪失と諸機能の類似，水平化傾向，財の豊富さと欲求充足の保障，人間学的な諸々の変容の展開」である（Adorno（2019a）540-541）。その根底には，市場経済の諸法則（Adorno（2019a）199）がある。

「…私たちはいまや純粋に市場経済の，純粋に経済の諸法則が支配する社会に現に生きているということを通じて，社会の全構造がよりいっそう透明になったのです」（ebd.）。

この箇所のアドルノの説明は，一見あたかも素朴な経済決定論のようだが，事柄は単純ではない。先述したように，概ねこの時期からアドルノの関心のひとつは経済と社会との関係へと向かっていった。アドルノの関心は経済の規定そのものへと向かったわけではない。むしろ，経済と社会の関係が社会化のプロセスにおいていかなる位置を占めうるか，経済以外の合法則性が存在しうるか，そして社会をどのように概念化するかが焦眉の問題となった。経済によって規定されていることを通じてこそ，社会を全体性として把握できるという点で，アドルノは狭義の社会

学批判へと向かったのである（その途上で近代経済学を含む経済学の検討も行なっている）。こうした関心が「経済の奇跡」の開始期に当たる 1950 年代後半の西ドイツ社会で芽生えた点は興味深い。以下，これらのモティーフに沿って講演内容を分析していこう。

3-1.「世界の縮小」と社会計画

アドルノは，確かに現代社会は計測不可能なほど分化しており，人口数を例に挙げて純粋に量的な点でも不透明性があると言う。だが反対に，諸々の基本的な構造は以前よりも不透明ではなく，反対により透明になっていると述べる（Adorno（2019a）194）。その際に彼が挙げるのが W. ウィルキーの「ひとつの世界（one world）」[(12)] である（Adorno（2019a）195）。アドルノは国民国家の新たな相互依存関係に「今日，全世界を支配している様々な力の働き」（ebd.）を見る。具体的には，アフガニスタンにおけるソ連の陰謀ないしアメリカの石油利害関係を例に挙げている。

> 「…現在の社会は，こう言ってよければ，統合されており，全般的に社会化されているのです。普遍的な機能連関に取り込まれていないようなセクターは，そもそももはや存在しません。治外法権は，社会にはもはや存在しないのです」（Adorno（2019a）196）。

こうした「世界の縮小」（ebd.）は，とりわけ技術手段（フランクフルト - ニューヨーク間の時間短縮など）とコミュニケーション手段（ラジオなど）によってもたらされたものである。

治外法権が存在しないというこうした認識は『社会学的補遺』第 2 章にも見られる。そこではこのように述べられている。「社会化の『外に』あると思われるものは，『エキゾチックなもの』がまだ本当に異論もなく存在しているのと比較して，はるかに社会の範囲外のものを黙認や計画的な企てに負っている」（Institut für Sozialforschung（1956）35，34 頁）。

しかしながら，以上のような「世界の縮小」は，「社会の傾向的透明化」にとっては外的な契機だと言う（Adorno（2019a）197）。むしろ本質的な契機は，「経済の，自由競争のあの有名な自由な力の働き」だとアドルノは述べる（ebd.）。アドルノが言うには，スミスの「見えない手」の働きは経済（Wirtschaft）と社会全体を再生産するが，「〔世界大恐慌という〕経済危機のもたらす様々な危険」（ebd.），すなわちこの社会がある程度自らを進んで晒している危険が増大したために，「自由競争と自由な力の働きがなお現在でも無条件に信じられている古典的な資本主義諸国においても，カタストロフの反復を今日まで回避してきた，無数のコントロールが組み込まれるようになっている」（Adorno（2019a）197-198）のである。

興味深いのは，彼が「経済学の専門的な論争に踏み込まずに」（Adorno（2019a）197）説明を行なっている点だろう。ここでアドルノが言及しているのは，アメリカ等と考えられる資本主義

諸国において実施されている市場メカニズムへの政策的介入と捉えてよいだろう[13]。アドルノが政策的介入に言及するのはこの講演だけではなく，10 年後の講演「新たな極右主義の諸側面」（1967.4.6）ではケインズ政策に批判的な言及を行なっている[14]。

アドルノが強調する通り，「西側の世界には計画経済は存在しない」（ebd.）が，政策を通じて自由競争への介入ないし調整が行なわれ，これをアドルノは「社会計画（gesellschaftliche Planung）」と呼んでいる（Adorno（2019a）540）。「新たな極右主義の諸側面」ではケインズ政策を明確に批判しているが，この時点では自由競争の放縦に歯止めをかけうる政策と，経済と社会とを関連づける議論を行なっている。いわゆる計画経済も，社会主義計算論争で知られる通り厳密な意味で数理に基づいた計画ではないが，アドルノがここで社会計画と述べているものは，政策的介入による自由競争のコントロールと理解してよいだろう[15]。

こうした議論は，1957/58 冬学期　社会学主ゼミ「経済と社会 1」の第 7 回（1958.2.4）での新自由主義をめぐる議論を想起させる。そこでアドルノは，なぜ新自由主義者たちは経済領域への諸々の介入に反対を表明するのか，という疑問を投げかけている（報告者のモールは，そうした反論は市場に反する介入にのみ妥当すると答えている）（FSA2，S.90）。

3-2. 合理性の増大，古い特権の妥当性喪失と諸機能の類似

さて，以上のような「社会の傾向的透明化」の主因となる自由競争の力の働きから見れば，不透明性はただ社会の「量的な増大」にのみ関係があるとアドルノは言う（Adorno（2019a）198）。「社会の合理化」をアドルノは次のように特徴づける。

> 「こう言ってよければ，社会の合理化へと向かう世界の普遍的傾向と関連があるのは，かつて社会を特徴づけていた非合理的な諸制度，すなわち専制や封建制度（そこでは不透明性が依然として見られたのですが），教会が政治的・社会的な統制権力だった限りで，それらが社会的なコントロール機能をますます失う事態であり，社会的コントロールが，社会における人間の現実の生を実際に再生産しているあの審級，すなわち経済的な審級へとますます移っていく事態なのです」（ebd.）。

「社会の合理化」が意味するものはわかりやすい。すなわち，封建制度などの非合理的な制度が社会的なコントロール機能を喪失し，人間の生を再生産する経済的な審級へと社会的コントロールが移行する事態である。

本節冒頭で引用した箇所，すなわち「私たちはいまや純粋に市場経済の，純粋に経済の諸法則が支配する社会に現に生きている」（Adorno（2019a）199）という表現は，経済決定論であるかのように見える。だが先述したように，「経済」は，社会的コントロール機能を有しているにし

ても，さらにコントロールの仕組みを組み込まねば危機を招来する性質のものである。したがって，この箇所の「経済」は，市場経済のみに限定されているわけではなく，生活過程の再生産に関わる広義のものと捉えた方が良いだろう。ここでアドルノは，社会化の決定的な力として経済を捉えている。以上の議論をアドルノはメモ書きでは「合理性の増大」と記している（Adorno（2019a）540）。

合理性の増大によって，個々の社会的機能は縮小し，質を奪われていく（Adorno（2019a）200）。製造工程が細分化することによって，部分機能が相互に類似するとアドルノは言う。こうした諸機能の類似は工業生産だけに限定されるものではなく，すべての考えられる機能に及ぶと，アメリカを例に挙げてアドルノは述べる（Adorno（2019a）201）。

こうした「世界の合理性の進展」（Adorno（2019a）202）というアドルノの主張は，部分的にはヴェーバーの定式と重複するものだった。

> 「世界の合理性の進展（fortschreitende Rationalität der Welt）という私の主張 —— これはヴェーバーが最初に鋭く定式化したものの，その展開はヴェーバーが夢見ることができた事柄すべてを凌駕するに至ったのですが —— が妥当ならば，社会の全体が自然の搾取と支配の巨大な織物を生み出す計画に近づいていくでしょう。そしてこの織物はもちろん秘密に満ちたものではまったくなく，その本質的な諸契機においてすべてが見通せるのです」（ebd.）。

ここでアドルノが言及しているヴェーバーの定式は，編者も指摘する通り（Adorno（2019a）654），いわゆる「脱魔術化テーゼ」だろう。アドルノの言う「世界の合理性の進展」は自然支配に帰結する。そうして織り上げられた「自然の搾取と支配の巨大な織物」は物象化されて，その原因も過程も機序も見通し難い不透明なものになっているかと思いきや，上述した「社会の合理化」に貫徹されている点において見通せる状態にある。したがって，「世界の合理性の進展」はヴェーバーの言う「隷従の殻（いわゆる「鉄の檻」）」に帰結するのではなく，むしろ反対に透明性の増大に帰着するのである[16]。

3-3. 水平化傾向 —— シェルスキー批判

「世界の合理性の進展」と関連があるのは，「現代社会における水平化傾向」（Adorno（2019a）202）である。職位の高い若い労働者と若い研究者の言語の間にはかつてと比べるとほんの僅かな違いしかないが（Adorno（2019a）202-203），依然として社会的権力と社会的無力との対立は存在し，貧しい者と富める者との鋭い対立はそもそも何も変わらないとアドルノは言う（Adorno（2019a）203）。

階級や身分はもはや存在せずいまや私たちは普遍的平等性の社会に生きている，という H.

シェルスキーのものと思われる言説に対して，かりに鉱山の職工長や首席係長がいまや小学校教員よりも稼いでいるとすれば，それが意味するのは，マルクスが言う階級なき社会に生きているということではなく，階級の諸々の差異を，小学校教員と鉱山の首席係長の収入の差とは異なる観点から見ることができる，ということだとアドルノは語る（ebd.）。

ここでアドルノが問題にしているのは，「諸々の真実の不平等（Ungleichen）がどのように平等に見えて，平等に考えられるようになるのか」（ebd.）という点である。こうした問題提起は，社会的威信やブルデューのディスタンクシオン（卓越化・差異化）に近い視点と言ってもよいかもしれない。貧困と富との対立については第5節で後述する。

シェルスキーの社会学に対して，アドルノはしばしば批判的にコメントをしている。1968夏学期の『社会学序説』講義でもシェルスキー批判に短くない時間を費やしているが（例えばAdorno（1993）91，95頁），この講演でのシェルスキー批判はほぼ同時代に行なわれたアクチュアルなものと見てよいだろうし，何よりも同時代の社会学者に対抗して社会の合法則性を剔抉しようとするアドルノの野心が垣間見える。

3-4. 財の豊富さと欲求充足の保障，量の質への転化

現在の技術状態は原理的にすべての人間に途方もない財を保障するかに見える傾向があるとアドルノは言う（ebd.）。財の量の増大には奇妙な事情がある（ebd.）。こうした財すべてが作られるのは，私たちを満足させるためだけではなく，何よりも利潤のためだが，それにもかかわらず財の量自体と財の質がきわめて増大し，その結果，伝統的な社会主義の窮乏理論とは反対に，無数の人間の生活水準が疑問の余地なく無限に上昇する（Adorno（2019a）204）。その結果，量の増大が新たな質に転化し，もはや誰も欠乏することがなくなる状態が予想されるようになる（ebd.）。アドルノは，F. ルーズベルトの「4つの自由」を挙げている（ebd.）。すなわち，ルーズベルトが1941年の一般教書演説で述べた，「人間にとって不可欠な4つの自由」，「言論と表現の自由，信仰形式の自由，欠乏からの自由，恐怖からの自由」だが[17]，とりわけここでアドルノが強調しているのが「欠乏からの自由」である。

> 「私たちが知っている世界は，そもそも飢える子どもがもはやいるはずのない世界ですが，まったく異なる側面もあり，肯定的な意味では，〔全員のための十分なキャビアはないのだと肩をすくめて私たちに語っていた〕私たちの親たちのあの世界よりもはるかに透明になっているのです」（ebd.）。

「人びとのためのキャビア（Kaviar für Volk）」という諺は，世界にはそもそも全員のための十分なキャビアが存在しないという事実を示唆する（ebd.）。ところが，チョウザメの養殖など現

在の技術水準からすれば，この諺は他の諺と同じく今では通用しなくなっているのだ。

「思うに，まだ子どもの頃に学んだ諺の数々を精査すれば，私たちの世界が被っている構造的な諸々の変化について真に正しいイメージを作れるでしょう」（ebd.）。

諺を引き合いに出し，諺が切り取った現実の変容を説くこうした叙述法は，帰国後市民社会に認知される契機となった『ミニマ・モラリア』に近いだろう。

上述の諸々の契機については，アドルノが亡命の時期を過ごしたアメリカに着目すれば特に明確になると言う（Adorno（2019a）205）。アメリカは確かにある意味では最も純粋に資本主義的な国だが，ヨーロッパに戻ってくれば，ある意味では贈与されている（Beschenktwerden）という感情，つまり「交換の全面支配からより自由という感情」（ebd.）を抱く。にもかかわらず，アメリカでは常に理想郷という感情を抱きもする。すなわち，筆舌に尽くしがたいほどの溢れる財が利用可能で，欠乏や貧困，倹しさという古い表象，さらには貧困や倹しさがもたらす，人間性を萎縮させ狭隘にする嫌悪すべき状態は乗り越えられたと感じられる，と言う（ebd.）。ドイツはこの点でアメリカの追随者なのだ（ebd.）。

亡命者アドルノが体得したアメリカとヨーロッパの比較の視座は，Offe（2004）が明らかにしているが，ここでアドルノは交換と富を基軸に両者の比較を行ない，いずれの地でも感じることになる両義的な感情について述べている。アメリカにおいては，ルーズベルトが大戦中に理想として語った「欠乏からの自由」を手にしているかもしれないが，その反面，交換原則の支配下にある。それとは対照的に，ドイツにおいては交換原則からは相対的に自由かもしれないが，全員のためのキャビアは十分には存在しない可能性がある。

こうしてアドルノは，「今日の人間的な社会にとって本質的なものと思えるもの」とはその敵対的な（antagonistisch）性格だと鋭く指摘して，休憩に入る（Adorno（2019a）206）。

4. 人間の「生きた感情」――「居心地の悪さ」の諸々の根拠

以上の透明化傾向に対して，不透明性の認識はなぜ生じるのだろうか。メモ書き冒頭の問題意識からすれば，その原因が第2部で語られるはずである。

講演の後半，第2部では人間の実際の生きた感情に焦点が当てられ，フロイトの「文化の中の居心地の悪さ（Unbehagen）」（1930）の根拠が議論される。アドルノが挙げているのは「社会構造（Sozialgebilde）と無力，人間の生産力と技術的生産力との不均衡，歴史的経過に対する盲目さの意識，技術自体の発展における非合理性の意識，適応と過剰な同一化」である（Adorno（2019a）541-542）。

第 2 部の冒頭で，アドルノはアパシーや不安，慄きといった生きた感情に言及する（Adorno（2019a）207）。では不安の源泉は何か。アドルノは，ハイデガーの議論と対比させて，アウシュヴィッツにその源泉を見出す。

「その際の契機は，まったく疑いなく，出来事への追想であり，すなわち，アウシュヴィッツの後で ── 社会との関係性のなかにいる人であれば ── もはや生が楽しまれうることは一度たりともないだろうという事態への追想なのです」（Adorno（2019a）207-208）。

アウシュヴィッツという経験を（なんらかの意味で）克服することは可能なのだろうか。アドルノはここでも自己省察にその回答を見出す。

「〔アウシュヴィッツという〕そうした諸々の経験はどうすれば克服できるのでしょうか？　自己省察（Selbstbesinnug）以外にはありません。ヒトラーの爆発的な支持拡大ですらシステムにとって外部のものとはみなさない，というあり方もこの省察に含まれます。私たちが住まう社会には，こうした破壊的な潜勢力をそのうちに有す諸々の力も増大しています」（Adorno（2019a）208）。

求められているのは，「ヒトラーをいわば私たち自身の一部として，私たちの社会の正当な子どもとみなす」（Adorno（2019a）208）ことである。私たちの不安は「きわめて歴史的で特殊なもの」（Adorno（2019a）209）であり，ハイデガー哲学は「不安という特殊な契機を，悪しき永遠へと逃避させる，特別な不正を犯して」いると，アドルノは鋭く批判する（ebd.）。

4-1. 社会構造と無力

次にアドルノは，疎外された世界，すなわち「冷たく，私たちに [疎遠なものとして] 対置される世界，私たちを単なる諸機能と過小評価する傾向のある世界」（Adorno（2019a）212，[　] 内は編者）における無力という感情に言及する。

「この管理された世界の内部で私たち全員を常に捉えているのは，無力という感情です。それを前にすると自己自身の決定を無限に行なえなくなる諸々の社会的権力に向き合っているという感情です。この感情はいわゆる従属的な機能に当てはまるだけではなく，最も上位の機能にも当てはまります。これは，少し前に〔講演前半で〕特殊化の管理として議論したものの反対の側面です」（Adorno（2019a）213）。

ここでアドルノは役人・大学教員としての自らも引き合いに出しつつ，役人を例に挙げている（Adorno（2019a）212）。

第一に考えるべきは経済の構造だとアドルノは言う。そこでは，自らの裁量で物事を進める自由で自立した企業家という理念型が人びとの前にはっきりと浮かぶというものではもはやなく，広く従業員の姿がありありと浮かぶのだと言う（Adorno（2019a）213）。アドルノは学生の意識調査の結果（安定志向）[18] を引き合いに出して次のように言う。

「人間は全員が固有の無力にもう一度署名していますが，固有の無力に多かれ少なかれ居心地の良さも感じているのです。それがあの無気力，とりわけあの政治的な無気力を生み，この無気力が最後には次の状態を招く一助になります。すなわち，すべてが今と同じままで，カタストロフを駆り立てるという状態です。カタストロフについては，虚しいお喋りに陥りたくなければ，それについて語らなければならないのです」（Adorno（2019a）214）。

個人の無力という論点はアドルノの社会論に頻出するが，無力を招来する権力の過剰よりもむしろ個人の力の過少，そうした無力への安住，さらには政治的アパシーとの関連という論点は他にあまり見られないものである。また，無力に帰結する管理された世界のありよう，具体的には雇用形態のありようへの言及は - アドルノの議論の範囲内では - 注目に値する。

4-2. 人間の生産力と技術的生産力との不均衡

居心地の悪さという感情の原因は，さらに人間の生産力と技術的生産力との間の誤解にあるとアドルノは言う。

「私には何の発見でもありませんが，人間に固有の諸々の力は人間の制御が効かなくなるもので，人間から離れて発展することによって様々な点から正しく歩まないものなのです」（Adorno（2019a）215）。

興味深いことに，この発言は当時発展を遂げていた原子物理学の理解可能性の問題をめぐってではなく，無数の領域で様々な心理的な資源が追いついていない事態をめぐってなされたものなのである（アドルノは G. アンダースの最新刊，『時代おくれの人間』（1956）に，心理学的に過ぎると評価しながらも同意している）。

技術に関してアドルノは意外なほど楽観的である。サイバネティクスを含む技術は「実際には…人間自身の伸びた腕に過ぎない」というのが，ロックの議論を想起させるアドルノの見解である（Adorno（2019a）216）。

「技術は災厄の原因ではなく，その反対のものになりうるかもしれません。災厄が存するのは，技術の合理性が根本的に依然として存続する非合理的な社会にはめ込まれている事態にあります。理性的な社会において，技術は，技術的生産力と社会とのあの対立が存在していた時よりも以前の時代に見られた，あの不安をかき立てる契機を失うでしょう。昔の時代には実際にはこうしたデモーニッシュな契機はまだそれほど目立っていなかったのですが。そもそも，人は技術へと話題を変えようとしているだけなのです。重要なのは技術でも人間でもなく，世界の客観的な構成（Verfassung）であり，その機能とは私たちひとりひとりのことであり，まさに技術でもあり，つまりは技術の使用のことなのです」（ebd.）。

技術に対するアドルノの楽観は，1959 年冬学期のゼミ記録[19] にも見られる。財とユートピアをめぐるゼミ生との討論において，アドルノは，「十分な財が存在すれば，この問題は現実的にすべて解決する。サン - シモンの思考は今日技術によってすでに乗り越えられている」（FSA2, S.333）と語っている。

このように，技術に対するアドルノの楽観は，技術そのものでも，技術使用がもたらす主観的な有用性等にあるのでもなく，技術使用を社会の構成員全員によって取り決める立憲的なありようにある。

4-3. 歴史的経過に対する盲目さの意識，技術自体の発展における非合理性の意識

第 2 部の冒頭でアドルノは，「居心地の悪さ」に関して，スイスで広まった「沈滞（Malaise）[20]」に言及しているが（Adorno（2019a）207），「…あの沈滞については，歴史的経過（Verlauf）そのものに盲目になっている意識が，皆さんにこの第 2 の〔後半の〕講演のはじめから示唆してきた意識が働いているのです」と言う（Adorno（2019a）216）。その歴史的経過とは，

「目的は依然として非合理的で手段だけが大規模に合理化されるということ，すなわちそもそも技術の最終目的が求められることはなく，技術は…物神になる（fetischisieren）ということ，技術はそれ自身のために営まれるということ，人間的目的との関係はますます技術から離れていくということです」（ebd.）。

『シュピーゲル』での対談を例示しながら，なぜ無条件に月に行こうとするのか，そもそも人は正しく知っているのだろうか，と疑念を投げかけ，アドルノは，私たちが従っている大きな社会的全プロセスについても同じことが当てはまると言う（Adorno（2019a）216-217）。もっとも，こうした手段と目的との転倒した関係は，目的への意識を明確にすることによって変容する可能性があると指摘する。

「技術の諸々の目的や社会的プロセス自体の諸目的についての意識が現在よりもはるかに明晰になるかぎりで，諸々の技術や個々の手段の発展にもはや頑なに忠誠を誓わないかぎりで，こうした傾向は広く変わりうるのです」（Adorno（2019a）217）。

高度に発展しつつある技術を何のために用いるのか，最終目的を明確にすることは，技術の物神化を防ぐことにもなりうるのだろう。次なる問いは，そうした目的の明確化が可能か否かである。

4-4. 適応と過剰な同一化

この箇所でアドルノは，「人間によって今日要請される適応は人間に対して明らかに過度な要求をしており，人間はそうした適応への要求にはもはや太刀打ちできない」（ebd.）という事態に対して，再度聴衆に注意を促している。ここから生まれるのは，世界の存立への過剰な同一化であり，人間の批判的能力の枯死である（ebd.）。すなわち人間は，「棘を蹴る／無益な抵抗をする（löcken gegen den Stachel）」のではなく，かつて『ミニマ・モラリア』で描出したように，「刺々しく足蹴する（löcken mit dem Stachel）」[21] のである（ebd.）。『ミニマ・モラリア』においてアドルノは次のように述べていた。

「今日では大半の人が刺々しく足蹴する」（GS4，S.124，158 頁）[22]。

「刺々しく足蹴する」状態は，精神分析で言う「攻撃者との同一化」[23] に他ならない。すなわち，「人間を盲目にしてしまうものを変えようとするのではなく，その弁護人に自らなってしまう」（Adorno（2019a）217）状態である。アドルノによれば，その原因は「変革が可能だという意識をもはやまったく経験しないから」（ebd.）であり，「そもそも変革が可能かもしれないというパースペクティブが人間においてすでに完全に死に絶えているから」（ebd.）なのである。

かつて人は社会のなかで抗いながら個人化を成し遂げていた。批判的能力が十分にあれば，蹴るという行為の当否や帰結等を判断できるはずである。ところが過剰に要請される適応によって，そもそも棘を蹴るという行為すら行なえなくなり，棘，すなわち同一化を強制する社会のなかで，他者に対して適応を強いるようになる。無力な個人にとって，そうした社会を変革する可能性すらもはや見出しがたくなっている。

「攻撃者との同一化」という自己防衛的かつ不幸な状態は，同一化を強制する社会のなかで人間が生きていく利己的な術であり，社会の変革を断念した帰結，場合によると断念の意識すら持たない状態の帰結でもある。その結果現出する状態について，アドルノはこのように述べる。

「囚人が最終的に自分を取り囲んでいる四方の壁を愛するように，人びとは世界をそのままの状態で愛する以外のことがもはやできなくなるのです」（ebd.）。

ここに描出されているものは，もはや適応ではない。人間の自己喪失の果てにある，自己と世界とが溶融した状態である。

5. 主観的反省形態の現実の基礎

第 1 部の社会の透明化テーゼと第 2 部の「居心地の悪さ」の根拠を探る議論からは，それらが十分に整合していない印象を受ける。アドルノが最後に付け加えるのは，「こうした諸々の主観的反省形態の現実の基礎」（Adorno（2019a）542）である。

5-1. 社会的矛盾

ここでアドルノは「文化の中の居心地の悪さ」をめぐる問いに回帰する[24]。彼によれば，「この思考は，経済というまったく異なる観点のもとでは，人間の衝動は極端にラディカルになり大きな帰結にまで至る〔というもの〕」（Adorno（2019a）217-218）であり，その際特に破壊衝動[25]が関わると言う（Adorno（2019a）218）。すなわち，破壊衝動は文明化の圧力によって私たち全員の中で呼び覚まされるものであり，今の世界が最終的に爆発してしまいかねない最も危険な潜勢力でもある，と言う（ebd.）。

経済という観点からの「居心地の悪さ」の再解釈にアドルノがさらに付け加えるのは，社会の分極化と貧困である。貧困は，フロイトの議論にアドルノが経済というまったく異なる観点を付け加えて創出した新たな論点と考えられる[26]。

「さらに付け加えたいと思います。居心地の悪さというこの雰囲気はついには次のことの根拠になるのです。すなわち，進歩のために大部分の階層が困窮したり強制収用されるか，少なくとも自らの社会的地位を喪失するというきわめて大きな代償を払うことを簡単に見過ごしてしまう，ということです」（ebd.）。

こうした「居心地の悪さ」は社会心理学的事実として解釈されるべきではなく，さまざまな客観的根拠を持つと言う（ebd.）。

「最も重要なのは，社会は，社会が成し遂げた進歩すべてにかかわらず，また欠乏を取り除く

ことが見通せるにもかかわらず，権力と無力との矛盾，さらには貧困と富との矛盾によって依然として特徴づけられている，ということなのです。そしてこの矛盾は私たちの共和国の繁栄のなかでも変わることなく持続しています。この矛盾は一定のあり方で見えなくなっているだけなのです」(ebd.)。

こうした矛盾を，アドルノは社会的矛盾と呼び，その不可視性を「可視性（Visibilität)」の問題と呼ぶ（ebd.)。その例としてアドルノが挙げるのが社会保険年金受給者の集団である。彼らはしっかりした組織も代弁者も持たず，「経済の奇跡」言説のなかでその声はかき消されている（Adorno（2019a）219)。「居心地の悪さ」は，「世界そのものが社会経済的な諸前提からすれば大半の人間にとって常になお非常に居心地の悪いものであるという事態に，本質的に関わって」(ebd.）いるのである。

「社会はそうこうする間に統合のなかで技術を発展させ，技術を通じて，貧困は確かになくなっていないにもかかわらず，広く気づかれずにするよう統合が成功してきたのです」(ebd.)。

社会統合が進展するなかで貧困は解消したわけではない。そうではなく，知られないようにされてきた点に社会的矛盾の先鋭化を看取できるだろう。

以上のアドルノの議論を，社会保障，とりわけ貧困研究の観点から補足しておこう。庄谷（1978）によれば，「年金保険から低い年金しか得ていない老人のうち，他にこれといった収入もなく，家族と離れて生活している老人層の中に，貧困の大きな量がかくされているということが，1952 年以来の調査の結果問題となってきた。しかし，社会保障制度の整備された全カタログと西独経済の繁栄のかげにあって，1974 年頃まではこの問題は十分有効に継承されてこなかった」という（庄谷（1978）1)。連邦社会扶助法（Bundessozialhilfegesetz）は 1961 年に制定されているが，いわば隠された貧困に対するアドルノの眼差しは，「可視性」という点でも代弁者不在という点でも鋭く，問題に対して的確だと言えよう[27]。貧困に関するアドルノの発言はさほど多くはないが，この講演での発言は同時代人の観察・証言・解釈として注目に値するだろうし，実際にアドルノが行なった経験的社会調査の成果の一部と見てよいかもしれない[28]。

5-2. 冷戦，ナショナリズム，消費への強制

アドルノはこれに冷戦，すなわち「絶滅兵器によって覆われている 2 つのブロックへの完全に非理性的な世界の分裂」を付け加える（Adorno（2019a）219-220)。「ひとりひとりの個人を死の脅威に晒す」(Adorno（2019a）219）冷戦に関して，アドルノの診断は楽観的でも悲観的でもない。「最も重要なのは，直接的に絶滅に至りかねない 2 つのブロックへと世界が分裂したこの

状態を，何らかの方法で修正することを学ぶことでしょう」(ebd.)。この点についてアドルノは何の幻想も持たないと明言している（Adorno（2019a）220)。

さらにアドルノは，「変わることなく持続する国際的なナショナリズム」と「消費への強制(Zwangskonsum)」を付け加える（ebd.)。

「これらすべては，人間がはめ込まれている消費への強制と大衆文化の諸傾向を通じて強化されます。消費への強制と大衆文化において，現在の状態を批判的に見通す代わりに，各自の意識においても固定してしまうようにするあらゆることが，私たちに不断にたたき込まれているのです」(ebd.)。

こうした消費への強制に不透明性認識や現状への意識の固定化の根拠のひとつが見出されるだろう。冷戦とナショナリズム，消費への強制をめぐるこうした議論には時代の刻印が見られるかもしれない。『啓蒙の弁証法』の文化産業論も同様かと思われるが，強制消費などは当時しばしば見られた大衆社会論と類似する点 —— ただし相当早い時期の議論ではある —— もあっただろう。

5-3. 社会的全主体の不在 - 目的論からの脱出

以上のように，アドルノは合理性の進展と自然支配を抱える社会のダイナミクスへの信頼を否定する。第 1 部では「社会の傾向的透明化」によって社会の理解可能性の増大が語られるが，これを可能にする合理性の進展と自然支配は第 2 部で見られたような「居心地の悪さ」や「不安」をもたらす。とりわけ，社会をめぐる安易な目的論をアドルノは批判する。

「何よりも，『人は何をすべきか？』と問うことを忘れてください。この問いは，そもそも社会的全主体（Gesamtsubjekt）のようなものを前提しています。それは，多様な階級や集団や権力ブロックの人間が有名な丸いテーブルを囲んで座ることができて，そこで，最善の方法は何か，共同の協議を行なうようなものですから。こうした表象は，例えば直接民主制のルールに該当するように，世界の全体制のなかでも時代遅れのもののように私には思えます。世界では，社会の個々の集団間の利害対立が先鋭化しており，合意と討議を通じて形成され，全体を秩序にもたらしうるような全主体がそもそも存在しないのです」（Adorno（2019a）221)。

ここで指摘されているのは，民主主義的合意形成の限界である。では，アドルノが提示する方法は何か。それが「抵抗の力」としての意識である。

「…意識は，—— 私はもはやみなさんを意識づけようと励ましはしません —— 意識それ自体が育

ちゆく抵抗の力と同じものなのです。それは，特定の集団や権力のようなものに対する抵抗ではなく，〔判決のように〕私たちに下されるものに盲目になっている状態に対する抵抗，その宿命に対する抵抗なのです。ここで，それに対置してきたものは，私たち自身の思考の帰結に他なりません。現在のところ，意識を通じてこの抵抗を力づけること，それゆえ私たち自身の思考にしっかりと（mächtig）留まり続けること以外には，多くは残され続けてはいません。もしかするとそこから，災厄を食い止めるさまざまな形を現実のものにすることもできるかもしれません」（Adorno（2019a）221-222）。

ここに見られるのはドイツ観念論の表象から連想されるような意識論への滞留でもなく，批判理論の後の世代で強調されるようなコミュニケーション的合理性や討議の安直な否定でもない。「私たち自身の思考にしっかりと留まり続けること」とは，無力と診断された私たちに残された数少ない手法，ただし力ある（mächtig）抵抗のあり方と考えてよいだろう。なおかつ，この「抵抗の力」は育ちゆくものなのである。

以上の議論から何らかの含意を引き出すとすれば，まず同時代の「経済の奇跡」における社会のダイナミクスへの留保があるだろう。確かに 1950 年代の西ドイツは高度経済成長を記録したが，市民社会での議論を喚起する様々な問題を残した。アドルノが講演中で示している貧困の不可視化もそのひとつだろう。また，他方でアドルノが肯定的な契機を見出しているものがあった。

「…公的な教養世界とは反対に，人びとの教養世界には常に懐疑とアイロニーと育ちゆく意識の伝統が働いていたのであり，それがもしかすると，人類が今日意のままにしている世界を変える最良の源泉なのです」（Adorno（2019a）215）。

ここでは明らかに，懐疑とアイロニーに満ちた日常の教養世界が公的な教養世界と対比されている。「抵抗の力」としての意識が育ちうるのは公的な教養世界においてのみではない。先述した自由競争への批判や消費への強制に対する懐疑的かつアイロニカルな姿勢と「抵抗の力」としての意識は，日常の教養世界においてこそ育まれうるものなのだろう。

さらに，民主主義の限界状況のもとでの抵抗の方法は，── コンテクストがまったく異なるとはいえ ── 強権主義が隆盛する現代にも妥当しうる意義を有しているだろう。

6. 講演のメモ書き

この講演にもメモ書き[29]が残されているが，講演はかなり忠実にメモ書きに沿って行なわれ

ている。したがって，メモ書きと講演内容とを照合すれば，講演がどのように語られ立ち上がったのか，「語り」のなかでアドルノがどの論点を重視したのか，ある程度明らかにできるだろう。また，メモ書きには存在せず即興で展開された論点も明らかになると思われる。以下，メモ書きと講演内容との照合を行なおう。メモ書きと講演内容との対応関係は次のようになっている。

・休憩前（Adorno（2019a）194 辺り～206）までは「透明性のもろもろのモティーフ」（a ～ g）が対応
・休憩後は S. 211 辺りから「居心地の悪さの諸々の根拠」（a ～ d）が部分的に対応
・S. 217 から「こうした諸々の主観的反省形態の現実の基礎」（a ～ e）が対応
　d）「透明性に対するヴェールの強化」には言及されず
・S. 221 から「問題はパンを求める人に石を与える」が部分的に対応（a, b）
　c）「経験に立ち戻る」,「学への構え」には言及されず

以上の対応関係のなかで,「d）透明性に対するヴェールの強化」に言及されていない事実には見るべきものがあるだろう。というのも，第 1 部で展開されている「社会の傾向的透明化」と対をなすように「ヴェール」すなわち理解不可能性についての議論が展開されるのではなく，むしろ消費への強制など他の論点に言及されているからである。1960 年代にしばしば前景化する理解不可能性（物象化と同義と見なしてよいだろう）の論点は，講演内容の予定に入れられていたものの，講演自体ではほぼ触れられていない。この理由については，講演に即して掘り下げることは困難であるにしても，社会概念の生成のなかである程度明らかにできると考えられる。すでに見た通り，この時期のアドルノの関心は社会を貫徹する合法則性へと向けられていた。「ヴェール」についての議論がなされなかった理由はここにあるのではないだろうか。

また，結論部分「問題はパンを求める人に石を与える」では，a)「全主体は存在しない」について述べられるが，b)「処方箋は存在しない」が先に述べられ，b)「意識 = 抵抗の増大」が結論に繰り延べられている。こうした順序変更による強調に，この時期のアドルノの思考の独自性が見られるのではないか。すなわち，安易な処方箋を否定し，討議批判と抵抗としての意識を強調する思考である。

また，興味深いことに，メモ書きには存在しない即興の論点には見るべきものがある。例えばアウシュヴィッツ以降の生に言及している箇所などである（Adorno（2019a）207-209)。ここには「アウシュヴィッツ以降詩を書くことは不可能である」（GS10.1，S.30，36 頁）という表現に結実した，アウシュヴィッツの生々しい衝撃を看取できるだろう。なお，この表現は亡命中に執筆された「文化批判と社会」（1949）に見られるが，論考自体は講演の 2 年前に刊行された『プリズメン』（1955）に収録されている。この講演が役人を対象とした「国家学の発展教育のため

のヘッセン州大学週間」で行なわれた事実を考慮すれば，ユダヤ系ドイツ人のアドルノ自身にとってだけでなく，広く市民社会で共有され考えられるべき事柄としてアウシュヴィッツが捉えられていたこと，あるいは少なくともアドルノのそうした教育的意図が見て取れる。

おわりに

第3節から第5節にかけて分析した講演本体は，アウシュヴィッツ以後の生など，アドルノ思想のモチーフとなる興味深い論点が随所に登場するものの，斬新とは言い難い印象を与えるかもしれない。しかしながら，そのテーマの一部が「経済と社会」ゼミへと結実した点で評価に値するだろうし，また，アドルノの社会概念の生成途上の萌芽として見るべき点があるだろう。

本論文冒頭の問いに戻ろう。講演の結論を振り返れば，この講演は思考に留まり続けること，すなわち「意識を通じてこの抵抗を力づけること，それゆえ私たち自身の思考にしっかりと留まり続けること」（Adorno（2019a）222）を訴えるものだった。やや論調を異にするとはいえ，「個人と社会の関係について」における脱人間化の終焉という結論，さらに遡れば「社会学のアクチュアリティー」における社会の自己省察と人間の形成という結論と，能動性と肯定性という点ではさほど大きく異なるものではないだろう。「育ちゆく抵抗の力」という結論箇所には，この講演が有す肯定性が看取できる。

さて，第1節で述べた通り，この講演がアドルノの社会概念の生成過程の一局面と見なせるとして，この講演にのみ「人間的」という形容詞が冠されている所以に少し踏み込もう。既述の通り，この講演においては複数の箇所で他の社会概念と重複する表現が用いられている。では，この講演の独自性（ないし生成過程の分岐）はどこに見出せるのか。私見では，アパシーや居心地の悪さ，不安，慄き（Adorno（2019a）207）といった「いや増す生きた感情」（Adorno（2019a）206-207）が展開される第2部ではないかと考えられる。この点は，あたかもアドルノの社会学のような「社会の傾向的透明化」が展開される第1部と鋭い対照をなしている。アドルノは居心地の悪さの諸々の根拠について紐解き，最後は抵抗の力としての意識で結語する。アウシュヴィッツという出来事を生み出したのも私たち人間（の社会）であるし，「〔アウシュヴィッツという〕そうした諸々の経験を克服する」（Adorno（2019a）208）のも人間である。そこでとりわけ強調されるのが人間の自己省察である。こうした点にアドルノは「人間的」の在りかを見ていたのではないか。自己省察を強調する点では，この講演はこの時点までのアドルノの思考から大きな乖離があるわけではない。むしろ，社会の自己省察と人間の形成を強調する「社会学のアクチュアリティー」から脱人間化の終焉への方途を説く「今日の個人と社会の関係について」，そして思考に留まり続けることに意義を見出すこの講演へと，能動性と肯定性は連続していると考えてよいだろう。さらに，矛盾を生きることに人間の可能性を見出す点でアドルノの認識は深化

していると見てよい。なおかつ，アドルノは思考への滞留にのみ人間の可能性を見出していたわけではない。講演の最終文に看取できる通り，「災厄を食い止めるさまざまな形を現実のものにすることもできるかもしれません」（Adorno（2019a）222）と，アウシュヴィッツのような災厄を防ぐ手立てを現実化する可能性を僅かに見出してもいる。アドルノは，思考への滞留の強調によって独我論に陥っている訳でもなく，いたずらに討議の可能性を否定している訳でもない。

ところで，アドルノは冒頭で社会学者と自認している通り，第1部では社会学的分析を行ないながらも，第2部ではフロイトを足掛かりに「居心地の悪さ」の客観的根拠に踏み込み，最終的には「自己省察」に重きを置く社会哲学を展開している印象を受ける。第1部の社会学的分析では，マートンやシェルスキーへの批判，さらにはヴェーバー・テーゼの批判など同時代の社会学と伝統的社会学を克服し，アドルノ自身の社会学を展開しようとする意図が見られる（その独自性をどの程度評価しうるかは別の問題だが）。第2部の分析では，経済と関連づけながらフロイトを再解釈しようとする意図が見られる。こうして講演を概括すると，第1部（透明化テーゼ）と第2部（「居心地の悪さ」の根拠）との間に若干の齟齬が存在する印象を受ける。

こうした齟齬ないし懸隔の印象は次に理由があるのではないか。第1部は主に経済による社会の規定と社会の描出に注力しており，第2部は社会と人間との関係性に議論の重心を移している。第1部では社会学的分析を行なっているが，独自の社会学へと展開していくわけではない。第2部と結論箇所では社会学にも心理学にも向かわず社会哲学へと進んでいる。ここにアドルノの議論の独自性が見られるだろうが，その独自性ゆえの若干の齟齬は否めない。

とはいえ，この齟齬は一方で社会概念のその後の彫琢へと，他方で社会哲学の展開へと至るものと解した方がよいと考えられる。第1部については，第1節で述べた通り，類似のテーマがその後のゼミで検討された可能性がある。また，ここでの社会概念の彫琢の不十分さがその後のゼミテーマへと展開していった可能性もあるだろう（1959夏学期ゼミなど）。

また，齟齬とは言い難い重要な論点がある。それが「居心地の悪さ」の客観的根拠としての社会的矛盾，すなわち「権力と無力との矛盾，さらには貧困と富との矛盾」（Adorno（2019a）218）である。とりわけ貧困の不可視化は「経済の奇跡」のただなかで指摘された，経済（「財の豊富さ」）と社会（「可視性」の問題）の結節点と考えられる。社会的矛盾そのものの不可視化が社会統合の進展を表現しているとすれば，ここを穿孔するのが「抵抗の力」としての意識なのであろう。

1957/58冬学期「経済と社会1」ゼミのもくろみをアドルノの研究計画と関連づけてよいならば，そこでは少なくとも以下の2つの問いがあったと考えられる。第1に全体性としての社会をめぐる省察であり，第2に経済と狭い意味での社会学との関係についての省察（FSA2，S.49）である。すなわち，そこで問われていたのは「社会学の脱経済化」だった（FSA2，S.51）。したがって，一方で社会概念の彫琢が進められ，他方で「社会学の脱経済化」に対して経済と社会と

の関係を再考する必要が生じたと考えられる。その一環が「交換」であり，その一例が1959夏学期ゼミ「社会とは何か」でのスミスの交換性向（Trieb zum Tausch）に触れた議論である（FSA2，S.325）。また，1957/58冬学期ゼミでの新自由主義批判も同種のものと言えよう。

「経済と社会1」ゼミの第1回での記録に見られる法則性への問い，すなわち「経済的なものに依存しない諸々の合法則性は存在するのか」（FSA2，S.50）という問いと，この講演でアドルノが力説している「社会の傾向的透明化」を関連づければ，さらに議論は広がるだろう。すなわち，「社会の傾向的透明化」は，市場経済の諸法則がその根底に存するとはいえ，「ひとつの世界」に収斂する世界の縮小など社会の趨勢の描出であり，その後のゼミでの問いへと派生しうるものだっただろう。

「経済と社会」というテーマは，少なくともアドルノ研究においてはほとんど言及されておらず[30]，また同様のテーマと取り組んだヴェーバーやパーソンズ，ポランニーなどとの比較可能性という点でも見るべき点がある[31]。さらには，戦後西ドイツの「経済の奇跡」を支えた「社会的市場経済」の背景をなすオルド自由主義との比較もまた有意義だろう（第3節で見た「社会計画」との比較など）。オルド自由主義と批判理論というたんなるイデオロギー闘争を超えて，経済と社会の関係へのもうひとつ別のアプローチが見出される可能性も否定はできない。とはいえ，以上はひとつの講演とゼミ記録のごく一部にもとづく推察である。この点を明らかにするにはゼミ記録の精査が必要であり，それは別稿の課題となる。

以上のように，この講演は能動性と肯定性の連続以外に，新たな議論を生んだ土壌と見るべきである。講演は社会概念の展開と，その後数年間議論されるゼミテーマの出発点と捉えられる。その基調を成すのは「経済と社会」というテーマだったと，現時点では言えるだろう。

資料：アドルノのゼミ記録（抜粋）[32]

アドルノは1954/55冬学期から社会学演習などを担当している。1933年の私講師就任による授業担当以降の社会理論関連のゼミとそのテーマを時系列で示すと以下の通りである。

1933夏学期〈予告〉[33]　ホッブズの国家哲学をめぐる哲学演習（ホルクハイマーと共同）
1954夏学期　哲学主ゼミ「ヴェーバーの理論的著作（ホルクハイマーと共同）」
1955夏学期　社会学の小規模講義「経験的社会調査の認識批判的諸問題（ホルクハイマー，B. ベッテルハイムと共同）」
1955/56冬学期　社会学主ゼミ「社会の理論をめぐるアメリカの諸テクスト」
1956夏学期　社会学実習「社会構造の諸問題をめぐって（H. プロスと共同）」
　　社会学主ゼミ「デュルケム」

1957/58 冬学期　社会学主ゼミ「経済と社会 1」

1958 夏学期　社会学主ゼミ「経済と社会 2」

1959 夏学期　社会学主ゼミ「社会とは何か？」

1960 夏学期　社会学ゼミ「哲学と社会学との関係をめぐる諸テクスト」

1962 夏学期　社会学主ゼミ「社会学の根本概念 1」

1962/63 冬学期　社会学主ゼミ「社会学の根本概念 2」

1963 夏学期　上級者のための社会学ゼミ「社会学理論の概念」

1963/64 冬学期　社会学ゼミ「ヴェーバー『経済と社会』から選定した章の書評」

1964 夏学期　社会学主ゼミ「個人と社会の問題をめぐって」

1965/66 冬学期　社会学主ゼミ「社会の概念をめぐって」

1967 夏学期　社会学初級ゼミ「社会学の中心諸概念」

1968 夏学期　社会学初級ゼミ「講義〔社会学序説〕をめぐる演習」

1969 夏学期　社会学主ゼミ「構造主義の諸問題」

1969/70 冬学期〈予告〉[34]　社会学主ゼミ「文化産業をめぐる新たな諸理論と素材」

参考文献

※訳文には筆者が断りなく変更を施している箇所がある。

Adorno, Theodor W.,（1970-1986）*Gesammelte Schriften*, hrsg. von Rolf Tiedemann unter Mitwirkung von G. Adorno / S. Buck-Morss / K. Schulz, Suhrkamp（= GS,〔　〕内は成立年）

4 = *Minima Moralia*〔1951〕（= 1979, 三光長治訳『ミニマ・モラリア』法政大学出版局 .）

8 = *Soziologische Schriften I*

9.2 = *Soziologische Schriften II*

10.1 = *Kulturkritik und Gesellschaf I*（= 1996, 渡辺祐邦・三原弟平訳『プリズメン』ちくま学芸文庫 .）

_____（1970）*Erziehung zur Mündigkeit*, hrsg. von G. Kadelbach, Suhrkamp（= 2011, 原千史・小田智敏・柿木伸之訳『自律への教育』中央公論新社 .）

_____（1993）*Einleitung in die Soziologie*, Suhrkamp（= 2001, 河原理・太寿堂真・高安啓介・細見和之訳『社会学講義』作品社 .）

_____（2003）"Gesellschaft: Erste Fassung eines Soziologischen Exkurses", in: R. Tiedemann（hrsg.）*Frankfurter Adorno Blätter VIII*, München: edition text + kritik im Richard Boorberg Verlag

_____（2019a）*Vorträge 1949-1968*, Suhrkamp

_____（2019b）*Aspekte des neuen Rechtsradikalismus*, Suhrkamp（= 2020, 橋本紘樹訳『新たな極右主義の諸側面』堀之内出版 .）

_____ / Max Horkheimer（2004-2006）*Briefwechsel 1927-1969*, hrsg. von Christoph Gödde und Henri Lonitz, Suhrkamp（= AHB,〔　〕内は執筆年）

Bd. 1〔1927-1937〕（2003）

Albrecht, Clemens / G. C. Behrmann / M. Bock / H. Homann / F. H. Tenbruck（1999）*Die intellektuelle Gründung der Bundesrepublik*, Campus

Bobka, Nico und Dirk Braunstein（2015）“Die Lehrveranstaltungen Theodor W. Adornos”, IfS Working Paper #8

Braunstein, Dirk（2011）*Adornos Kritik der politischen Ökonomie*, Transcript

_____（hrsg.）（2021）*Die Frankfurter Seminare Theodor W. Adornos*, De Gruyter（=FSA,〔 〕内は開講年度）

Bd. 1〔Wintersemester 1949/50 – Sommersemester 1957〕

Bd. 2〔Wintersemester 1957/58 – Wintersemester 1960/61〕

Bd. 3〔Sommersemester 1961 – Wintersemester 1963/64〕

Bd. 4〔Sommersemester 1964 – Sommersemester 1969〕

Demirović, Alex（1999）*Der nonkonformistische Intellektuelle*, Suhrkamp（= 2009-2011，仲正昌樹責任編集『非体制順応的知識人』御茶の水書房 .）

Der Hessische Ministerpräsident（1952）*Hessenatlas*, Wiesbaden

Freud, Sigmund（1991）*Gesammelte Werke Bd. 14, Werke aus den Jahren 1925-1931*, 7. Aufl., S. Fischer（= 2011，高田珠樹・嶺秀樹訳『ある錯覚の未来／文化の中の居心地悪さ』岩波書店 .）

Institut für Sozialforschung（1956）*Soziologische Exkurse*, Europäische Verlagsanstalt（= 1983，山本鎭雄訳『現代社会学の諸相』恒星社厚生閣 .）

Jameson, Fredric（1990）*Late Marxism*, Verso.（= 2013，加藤雅之ほか訳『アドルノ』論創社 .）

片上平二郎（2018）「愉しいアドルノ」,『応用社会学研究』60

Müller-Doohm, Stefan（1996）*Die Soziologie Theodor W. Adornos*, Campus Verlag

_____（2003）*Adorno: Eine Biographie*, Suhrkamp（= 2007，徳永恂監訳『アドルノ伝』作品社 .）

Neumann, Gerhard（2003）“Zweite Lese”, in: Andreas Bernard und Ulrich Raulff（hrsg.）*Theodor W. Adorno >Minima Moralia< neu gelesen*, Suhrkamp

入谷秀一（2022）「笑うアドルノ」,『社会思想史研究』46

Offe, Claus（2004）*Selbstbetrachtung aus der Ferne*, Suhrkamp（= 2009，野口雅弘訳『アメリカの省察』法政大学出版局 .）

表弘一郎（2022）「『諸関係の脱人間化』と『人間の形成』」,『城西大学大学院研究年報』35

_____（2023）「脱人間化の終焉」,『城西大学大学院研究年報』36

Parsons, Talcott and Neil J. Smelser（1956）*Economy and society*, Routledge & Kegan Paul.（=富永健一訳（1958）『経済と社会』岩波書店 .）

Schumpeter, Joseph A., translated by Redvers Opie（1934）*The theory of economic development*, Harvard University Press.

Schwarz, Martin（2019）“Editorische Nachbemerkung”, in: *Vorträge 1949-1968*

庄谷怜子（1978）「西ドイツにおける老人の貧困問題」,『社會問題研究』28（3･4）

_____（1979）「西ドイツにおける貧困の一形態（1）」,『社會問題研究』29（1･2）

_____（1980）「西ドイツにおける貧困の一形態（2）」,『社會問題研究』29（4）

Tiedemann, Rolf（1975）“Editorische Nachbemerkung”, in: Adorno, *GS9.2*

《注》

（1） もっとも，過去の「克服」の妥当性や戦後ドイツ社会に対する「診断」の立場性，さらに歴史の評価可能性そのものは別の問題である。歴史家論争などを参照。

（2） フランクフルト大学におけるアドルノの授業担当（講義，ゼミなど）は Bobka und Braunstein

(2015) が最も詳しい。ゼミ記録（FSA）からは「アドルノの著作の生成も少なくとも部分的に再構成」できる可能性（Bobka und Braunstein（2015）7）があると指摘されているが，さらには，講義や講演は存在するものの，著書としてまとめられていない断片的な論文間の関係が明らかになる可能性もあるように思われる。例えば社会理論では，晩年に出版の計画があったとされる『今日の社会における統合と脱統合』（Tiedemann（1975）404）などである。今後，検討する余地が大いにあるだろう。

（3） 近年，既存のアドルノ像を覆す新たな研究が現れている。片上（2018），入谷（2022）などを参照。

（4）この点について，詳しくは表（2022），表（2023）を参照。近年，アドルノが戦後ドイツ社会の知的形成に積極的に関与した事実や教育に注力した事実が明らかにされている（Adorno（1970））。こうした能動性と肯定性がいつ頃まで持続したのか，またこうした事実にも関わらず，否定性のイメージがいつ頃形成されたのかが問われるべき点だろう。

（5） 本論文は，アドルノの社会概念の意義等を扱うものではない（例えばホネットによる批判やそれへの反批判など）。この論点については Jameson（1990）や Müller-Doohm（1996）などを参照。むしろ，ゼミ記録と講演との関係などのいわば生成史に着目するところに本論文の独創性がある。

（6） R. Tiedemann（2003）は 1954 年草稿を『社会学的補遺』の草稿とみなしているが（Adorno（2003）150），文献上の根拠は特に示されてはいない。1954 年草稿の執筆の契機は，おそらく『社会学的補遺』プロジェクトと考えられるが，現在のところ詳細は不明である。ゼミ記録にも該当するものは見当たらないが，書簡等で明らかにできる可能性は残されている。

（7） このゼミ記録には，新自由主義をめぐる研究発表とアドルノとハーバーマスによるコメントが残されている（FSA2，S.88-90）。こうした「経済と社会」というテーマが，その後のアドルノの思索のうちでいかなる場所を占めたのか，あるいはハーバーマスのその後の思想形成にどのような影響を与えたのか（自由競争へのコントロールの組み込みというアドルノの発想と，グローバル経済の統御というハーバーマスの主張の類似性など），その行方が問われるべきだろう。アドルノのゼミ記録をまとめた D. Braunstein は「経済と社会」ゼミに言及しているが（Braunstein（2011）269ff.），この講演をも含めた検討は行なっていない（もっとも，講演録の出版はごく近年であるため，その点は考慮しなければならない）。

（8） もっとも，「経済と社会」という問題圏がこの講演において初めて立ち現れたわけではない。1954 年草稿にも，社会学と経済学との区別をめぐる以下のような記述が見出される。

「社会学がその固有の対象としている根本的な生活過程は確かに経済的な過程だが，経済の諸法則は生活過程を理念に従って様式化する。この理念は解明図式として熱心に自己を貫き通せば通すほど，世界のなかで自己を実現することがなかったのである。社会学は政治的という点においてのみ経済の学問であり，社会の理論を必要とし，これは経済（das Wirtschaten）の確立した諸々の形態や経済の諸々の制度すらも社会的機構からさらに導出する」（Adorno（2003）147-148）。

『社会学的補遺』第 2 章にも，ほぼ同様の記述がある。

「根本的な生活過程は社会学の固有の対象であり，しかも経済学の対象でもある。しかし経済法則はこの生活過程を厳密な合理的行為の概念体系にしたがって，すでにパターン化している。この概念体系は説明図式として熱心に自己を主張すればするほど，それは現実世界ではますます現実化されることはない。社会学はもっぱら政治経済学としての経済学であり，また社会学は経済活動の既存形態と経済制度自体を社会的な規定によって演繹するような『社会の理論』を必要とする」（Institut für Sozialforschung（1956）32，30 頁）。

若干筆致は異なるものの，いずれにおいてもアドルノが社会学の固有性の描出に注力していることがわかる。その裏面として，当然のことながら経済学への無関心さも明らかである。ここでは，経済的なものとしての生活過程を対象としつつも，生活過程を支える諸々の制度へのアプローチを政治経済学と表現している。後述するように，やや強く解釈すれば，ここに見られる「政治的」とは経済に対する政策的介入と言ってよいかもしれない。この問題圏の根源についてはさらなる探究の必要がある

だろう。Parsons / Smelser（1956）の出版はほぼ同時期だが，少なくとも講演「今日の人間的な社会」においてパーソンズに言及している箇所は存在しない。

（9） この大学週間については表（2023）を参照。

（10） このメモ書きと講演本体との関係については第6節で詳述する。

（11） 編者によれば，Der Hessische Ministerpräsident（1952）を指しているとのこと（Adorno（2019a）652）。

（12） この表現は1954年の草稿と『社会学的補遺』でも用いられる（Adorno（2003）148，Institut für Sozialforschung（1956）35，34頁）。

（13） この講演では明確にケインズ政策に言及されているわけではなく，ケインズの名が挙げられている訳でもない。一般的に想起される通り，ケインズとアドルノに直接的な交流はないが，相互に一度の言及がある。ナチス党から逃れるべくアドルノがイギリスに活路を見出そうとした際，ケインズはベヴァリッジへ手紙を書いており（1933.9.28），そこでアドルノのことを高く評価している（Müller-Doohm（2003）285，218頁）。他方，アドルノのケインズへの言及も手紙に見られる。ホルクハイマーはアドルノ宛ての手紙（1936.11.14，NY）でK. マンデルバウムとポロックによるケインズ一般理論の批判について言及しているが（AHB1，S.212），アドルノはその返信（1936.11.28，Oxford）で「友人の（Redvers）Opieが，あの本は無意味なものだ（ein Schmarren）とよく言っています」（AHB1，S.234）と述べている。Redvers Opie（1900-84）はシュンペーター『経済発展の理論』を1934年に翻訳したばかりだったため（Schumpeter（1934）），シュンペーターとケインズの当時の関係を考えれば，この発言は不自然なものではないだろう。社会研究誌主宰のホルクハイマーの意向をしばしば汲み取りがちなアドルノの態度を考慮に入れると，この箇所でアドルノ自身はケインズ理論に対して判断を下していないと解釈してよいかもしれない。

（14） そこではこのようにケインズ政策を批判している。「たしかにケインズ主義的リベラリズムは，古典的なマルクス主義理論にあった社会構造の変革のポテンシャルを回避するのですが，その一方で，とにかく結果として，いまお話ししたような階層の困窮化の脅威を高めるのです。こっそりとやってくるものの，はっきりと感じ取れ，まさにケインズ主義的な拡張主義が行き着く先であるインフレーションという単純な事実を思いおこしてみてください。さらに…この間に非常にアクチュアルなものになり始めた，あるテーゼを思い出してみましょう。すなわち，完全雇用が実現し，あらゆるところで繁栄の兆しがあるにもかかわらず，技術の発展による失業という亡霊がいまなお徘徊している，というテーゼです」（Adorno（2019b）11-12，7-8頁）。ケインズ政策とインフレーションという論点は1960年代以降に見られたよくある議論と捉えてよいだろうが，構造的失業（技術の発展による失業）の指摘は鋭い。10年を経た政策的介入の捉え方の変化は興味深く，西ドイツ社会経済の変化の反映であるかのようにも読める。

編者によれば，1966年は西ドイツ経済が高度経済成長後に深刻な危機に陥った年であり，景気後退に対して，大連立政権に加わった経済相のK. シラー（SPD）のもとで，ケインズ主義的な理念を志向する国家による景気刺激策を用いて対抗したとのことである（Adorno（2019a）730-731）。

（15） こうした「計画への関心」とでも呼ぶべき観点は，1951年の「社会学のアクチュアリティー」にも見られる。すでに指摘したことだが，マンハイムの計画論と比較すべき論点かもしれない。あるいは，F. ポロックの計画経済論の影響が見られるかもしれない。今後の検討が待たれる。

（16） ヴェーバーをめぐるこうした議論は，1954夏学期の哲学主ゼミ「ヴェーバーの理論的著作」にその一部を負っているのかもしれないが，検証が必要である。

（17） 詳しくは，https://www.archives.gov/milestone-documents/president-franklin-roosevelts-annual-message-to-congress を参照（最終閲覧日：2023年8月17日）。

（18） 編者によれば，調査プロジェクト「大学と社会」と考えられるとのこと（Adorno（2019a）656）。

（19） 1959年冬学期の社会学主ゼミのテーマは「社会とは何か？」であり，4回分の記録が残されている（FSA2，S.324-342）。そこではスミス，サン - シモン，マルクスが取り上げられている。ただ，テー

マの選定理由，および考察対象の選定理由はゼミ記録からはわからない。

(20) 編者によれば，スイス語の Malaise は 1957 年にはすでに流通していたが，1964 年に初めて文献（Max Imboden, *Helvetisches Malaise*）で用いられたとのこと（Adorno（2019a）655）。

(21) 編者によれば，初出は『ミニマ・モラリア』とのこと（ただしページ数が誤っている）（Adorno（2019a）657）。

(22) 「Zweite Lese」中に唐突に挟まれているこの一文は，訳注によれば，『使徒行伝』26 章を踏まえているとのことである（GS4，397 頁）。すなわち，キリストへの迫害の無意味さがパウロ（ヘブライ語でサウロ）に語りかけられる同章を踏まえて，アドルノは社会体制への過剰な同一化を描出している。

この一文について，Neumann（2003）は，「外来語は言語にとってのユダヤ人である」という一文も含めて，次のように述べている。「本来性の隠語に対抗して新たに見出されうる言語は，固有のもののなかに外的な痕跡を，矛盾のなかに格率（Spruch）を，パウロのなかにサウロを発見しなければならない。そうした言語は - それは語り（Zunge）なのだから - 刺々しいものであるのではなく，棘に対抗（wider den Stachel）しなければならない」（Neumann（2003）64）。

(23) 編者は，アンナ・フロイトの「自我と防衛機制」への参照を促している（Adorno（2019a）657）。

(24) フロイト自身はこの論考のなかで次のような問題提起を行なっている。「文化の幸福価値が疑われる今，この文化というものの本質についてわれわれも思いをめぐらすべき時である」（Freud（1991）448，97 頁）。これに彼自身は次のように答えている。「文化とは，人間という種において演じられるエロースと死とのあいだ，生の欲動と破壊の欲動（Lebenstrieb und Destruktionstrieb）とのあいだの闘いをわれわれに示しているに違いない」（Freud（1991）481，135 頁）。結論は以下である。「人間の共同生活は，人間自身の攻撃欲動や自己破壊欲動によって攪乱されている。人類は，これを自らの文化の発展によって抑制できるのか。どの程度までそれが可能なのか。私には，その成否が人間という種の運命を左右する懸案ではないかと思われる」（Freud（1991）506，162 頁）。第 2 次大戦以前に執筆されたフロイトの論考とアドルノによる解釈との間には，アウシュヴィッツという出来事が決定的に介在している。

(25) フロイト自身は破壊衝動についてこう述べている。「人間とは，誰からも愛されることを求める温和な生き物などではなく，生まれ持った欲動（Triebbegabungen）の相当部分が攻撃傾向だと見て間違いない存在なのだ」（Freud（1991）470，122 頁）。

(26) もっとも，フロイトが経済に言及していない訳ではない。同論考には，「社会の経済構造（wirtschaftliche Struktur）」（Freud（1991）463，114 頁）という表現がある。

(27) ちなみに，庄谷（1979）は Obdachlose，すなわち「狭義には，家がなく，困窮者用住宅に入居を指示された世帯」について次のように述べている。「1975 年に西ドイツでは，Obdachlose，Nichtseshafte〔非定住者〕および設備不完全な住宅に住む人は合わせて，計 150～170 万世帯（6.8～7.7%），290～320 万人（13.2～14.5%）とみられている。彼らは居住環境において不利な条件におかれており，その多くは所得減または所得喪失の時に，または都市再開発措置で，とくに大都市の過密の中で Obdachlosigkeit の危険におびやかされているという」（庄谷（1979）25，〔　〕内は文献の表現）。庄谷（1979）によれば，「〔Obdachlose の〕その範囲には年金生活者，失業者，労働者 Arbeiter，職人 Handwerker らのように物質的に恵まれず，政治的にも特権をもたない人々が含まれている」（庄谷（1979）26）。また，庄谷（1980）によれば，「Obdachlose の問題は端的に第 2 次大戦後に生じている。敗戦後，家を失った人，疎開先から引揚げて来た人々は，都市に戻っても防空壕状の建物に住む外なかった。…ノルトライン = ヴェストファーレン州のアーヘン市においても同様であった。1958 年 9 月に同市ではやっと居住用防空壕を撤去した」（庄谷（1980）4）。

なお，これら一連の研究は，欧州においては概ね 1980 年代，日本においては概ね 1990 年代に始まる，より包括的な概念枠組みとしての社会的排除研究の進展以前になされたものと考えられる（実際，庄谷自身がその後社会的排除研究を行なっている）。

(28) こうした貧困への眼差しは，「ダルムシュタット・ゲマインデ研究」などの経験的社会調査の成果かもしれないが，検証が必要である。

(29) タイプされたメモ書き（と自筆の書き込み）と出版稿『矛盾に満ちた社会』などの関係については，編注を参照（Schwarz（2019）650-651）。

(30) Braunstein（2011）は，管見の限り数少ない例外である。Braunstein（2011）は「経済と社会」ゼミに言及しているが（S. 269ff.），資料上の問題がある。これについては脚注 7 を参照。

(31) 実際，1957/58 冬学期　社会学主ゼミ「経済と社会 1」の冒頭ではヴェーバーの「経済と社会」を読むものではないと断っているが（FSA2，S.49），1963/64 冬学期　社会学ゼミではヴェーバーの「経済と社会」の部分的な輪読を行なっている。

(32) 以下は，Bobka und Braunstein（2015）と FSA1～4 に依拠し，昇順で表記している。

(33) このゼミが「予告」となっているのは，1933 年 3 月の全権委任法成立によってナチス党が政権を掌握し，ユダヤ系ドイツ人の学者たちがほぼ例外なく教授資格を剥奪されたためである。

(34) このゼミは 1969 年 8 月にアドルノが没したため「予告」で終わっているが，講義も含めてこの学期の授業計画は興味深い。すべて示すと次の通り。哲学講義「文化産業とマスメディア」，哲学主ゼミ「啓蒙の弁証法をめぐる実習，とりわけ『文化産業』の章をめぐって（ホルクハイマーと共同）」，社会学主ゼミ「文化産業をめぐる新たな諸理論と素材」（Bobka und Braunstein（2015）18）。

Transparent Society and "Growing Force of Resistance"：
Genesis of the problematics "Economy and Society" in the 1950s Adorno's Thought

Koichiro OMOTE

Abstract

In this paper, we focus on the 1950s Adorno's thought about economy and society, which was first referred in his lecture "Humane society today（Die menschliche Gesellschaft heute）" (16.10.1957) contained in his recently published *Vorträge*. This lecture provides rich sources and various themes which were subsequently discussed in his late 1950s seminars（for example, rationalisation of society, social planning, contradiction of poverty and prosperity and so on）especially in the German economic miracle ("Wirtschaftswunder"). And it also could be interpreted as the making process of his concept of society. Analysis of this lecture could give us new perspective of Adorno's thought, that is, its persistent positivity. "Growing Force of Resistance" is the keyword of this newly uncovered characteristic of Adorno's thought, which has been underestimated in previous Adorno studies. However, further analysis and examination of his seminar protocols could be needed.